

大谷光瑞鏡如上人について

矢 島 嗣 久

浄土真宗本願寺派第二十二世門主大谷光瑞鏡如上人は、明治後期から大正初期にかけて、中央アジアの仏教美術関係の九千点に及ぶ多くの文物を収集した探検隊の組織者である。晩年は病氣療養のため来別し、当地でなくなっている。

一 光瑞の出生と生い立ち

大谷光瑞は、浄土真宗本願寺派京都西本願寺二十一世法主明如上人^{ほつみよら}大谷光尊の長男として、明治九年（一八七六）十二月二十七日に生まれた。名前は峻磨^{たかまろ}という。十歳の時得度（出家）して法名を鏡如^{きやうにょ}、諱^{いなな}を光瑞と称した。鏡如光瑞は西本願寺始祖の准如^{じゆんにょ}から教えて十二代目にあたる。

入学し、その後、二十三年には神田の共立学校へも入学したが、軍事教育や校風にあきたらず、それぞれ退校している。

京都へ帰った十五歳の光瑞は、民家を借り手勉強生活を送ることになる。内外の古典や宗典、書道、歌道の師は、時間を決めて交代でかよって来た。

明治二十四年（一八九一）、光瑞十六歳のとき大谷本願の中へ移され、足利義山^{あしかがよしやま}、前田慧雲^{まへだえいん}らの碩学に教えを受けた。光瑞は其のごほとんど独学で、歴史、地理、植物、農学、工学、地質学、天文氣象、海洋学等、驚くべき多岐にわたる学問を身につけた。彼は教典研究のため漢文に親しんだ。また、梵語を極め、英語とドイツ語もマスターした。

光瑞は明治十九年（一八八六）に東京へ出て学習院に

明治三十一年（一八九八）一月、二十二歳になった光

瑞は侯爵九条道孝の娘箒子を妻に迎えた。箒子は明治二十五年（一八九二）に十一歳の少女で西本願寺へ入興し、十七歳になって正式に光瑞と結婚式を挙げた。箒子は後の貞明皇后（節子、大正天皇の皇后）の姉にあたる。明治四十年（一九〇七）、大谷光瑞の妻箒子の弟九条良致男爵に光瑞の妹武子を嫁がせた。

武子は、西本願寺法主大谷光尊の次女として明治二十年（一八八七）に生まれた。九条武子は佐々木信綱に師事した歌人で、歌集「金鈴」、「薰染」、「歌文集「無憂華」」などがある。

二 大谷探検隊

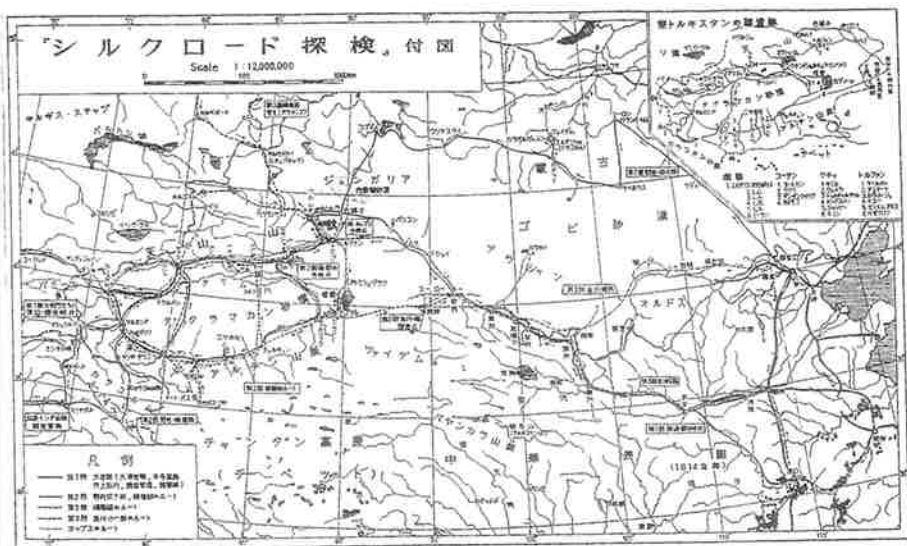
大谷光瑞の初めての外遊は、明治三十二年（一八九九）一月から五月にかけて行われた清国（現中国）巡遊だった。この旅で漢口（現武漢市）から北京まで、一千キロを越える大陸縦断を二十二日間かけて踏破した。

彼は同年十二月、再び外国旅行に出かけた。インドからヨーロッパ各地を回り、ロンドンに三、四年間遊学する予定である。



ヘインやスタインら世界各国の中央アジア探検の活躍は、光瑞の西域（現中国西部）探検を決意させる動機となった。彼にとつて西域こそは、かつて仏教が東漸した重要な地域であり、この地方を探検して古代の教典を収集することはアジア人としての夢だった。

明治三十五年（一九〇二）、光瑞は父光尊の病状が悪化したため帰国することになった。英国からの帰途を利用して中央アジア探検隊（第一次）を組織した光瑞の一行五名が、八月中旬にロンドンを出発し、ロシア領を経



由しての西域を目指した。光瑞は二十七歳、従者の四名は本願寺末寺の若者達である。

探検隊の一行はカスピ海を横断後、サマルカンドを経てオシユに着いた。海拔三八〇〇メートルのテレク嶺を越えて、九月には清国領新疆省カシユガルに入り、タシユクルガンに到着する。

同年十月中旬、光瑞は隊を二つに分け、本多惠隆、井上弘円の二名を従えインド領へ入り、海拔四六五〇メートルのミンタカ嶺を越えて、各地の佛跡を歴訪した。

翌明治三十六年一月、光瑞はカルカッタで父明如門主光尊（五十四歳）の死を知り、探検行を中止して日本に帰った。二十八歳の鏡如上人大谷光瑞は、二十二世法主西本願寺住持を継職して、同時に本願寺派管長となる。

タシユクルガンで光瑞と分かれた渡辺哲信、堀賢雄の二名は、ヤルカンド、コータン、クチャ地域を探検して多くの出土品を得た。二人は帰途ウルムチ、ハミを経て甘肅省に入り、翌年の二月末、西安（旧長安）に達した。光瑞、箒子夫妻は、明治三十九年（一九〇六）九月末、清国からインド、ヨーロッパ各地を回り、ロンドンに三

カ月間滞在して明治四十三年十月に帰国した。

第二次大谷探検隊は、橋瑞超、野村栄三郎の二名が明治四十一年（一九〇八）六月に北京を出発して西域へ向かった。二人は外蒙古のクローロン、ハタットを経て十月下旬、新疆のウルムチに到着後、トルファン、楼蘭、クチャ、コータンなどを探検する。

探検を終えた橋、野村の両名は、明治四十二年十月初旬にヤルカンドを出発し、海拔五六五〇メートルのカラコルム峠を越えてインドのカシミールに入り、光瑞等と再会した。

第三次探検隊は、明治四十三年（一九一〇）八月に橋瑞超がロンドンを出発して、十月に再び西域のウルムチへ達する。

光瑞の妻箒子は明治四十四年一月、三十一歳で風邪をこじらせて死去した。光瑞は子宝に恵まれなかった。

同年五月頃、橋瑞超が音信不通となる。光瑞は六月、吉川小一郎を西域へ向けて出発させた。吉川は上海、西安を経て十月初旬敦煌へ到着し、待つこと三カ月余り、翌明治四十五年一月、橋瑞超と感動的な対面をする。

橋瑞超は辛亥革命を避けてしベリヤ鉄道で帰国した。橋と分かれた吉川小一郎は同年五月、新疆からトルファンに到着して、多くの出土品を手に入れた。

大正三年（一九一四）一月、吉川小一郎はトルファン、ハミ、敦煌を経て長城外のアラシャン山脈の南麓を東行する。彼はゴビ砂漠からオルドス地帯の包頭を経て張家口に到着し、五月中旬北京に出て帰国した。

三 引退後の光瑞師

大谷光瑞鏡如上人は、大正三年（一九一四）五月、本願寺財団疑獄事件のため、三十九歳で西本願寺住職と真宗本願寺派管長を辞任、伯爵を辞退した。事件の真相は、西本願寺の財政破綻のため幹部が金策を誤ったことによる。膨大な赤字の原因は、日露戦争（明治三十七・八年）に本願寺として軍事献納、軍隊慰問、前線布教、遺族救済などに全面協力したことが一番大きかった。また数次にわたる大谷探検隊の派遣、明治四十三年（一九一〇）には神戸の六甲山麓にケープルカー付きの別荘二葉荘を建て、その近くに武庫中学を建てたことなどが主なもの

である。

光瑞鏡如上人は、大正三年五月三十日に隠居し、六月二日、弟光明の長男四歳の照が伯爵を継いだ。

光瑞は、六甲の別荘二楽荘の家具・古美術品等を競買にかけて整理を行ない、外遊の途についた。その後の光瑞は海外生活が多く、中国上海に住居を構え、中国、南洋のジャワ（現インドネシア）、トルコ等で事業を経営した。彼は辞任以後三年間も日本の土を踏んでいなかった。

大正六年（一九一七）十一月、満州（中国東北部）から台湾に渡った光瑞は、翌七年一月三日、台北を発って九州門司に入港、五月門司を出発して大分県別府の鉄輪貝島別邸に入った。ここで宗門関係者の集会があり、光瑞鏡如上人を中心として「光寿会」を組織することが決まった。光寿会は梵語の經典を日本語に翻訳するための機関であるが、光瑞師の講演会の開催も計画されていた。光瑞師は一月十日に別府を出発して、長崎から乗船し香港にむかった。

昭和二年（一九二七）五月二十六日、大谷光瑞は広島

光寿会支部発会式に臨み、「他力安心の極致」について講演を行なった。

翌日の二十七日には、光瑞が大分県別府市を訪れ、別府光寿会支部発会式に臨み、前日の広島と同様の講演を行う。二十八日には門司を出発して、上海に向かった。

昭和二年十月二十日、嗣法光照伯爵（当時十七歳）が成年を迎えて、真宗本願寺派西本願寺住職ならびに管長（一宗一派を管轄する長）に就任した。光瑞鏡如上人の退職以来、十三年間空位だった門主の座が満たされた。十一月、光瑞は満州南西部の大連に向かう。当時、光瑞の年齢は五十二歳だった。

光瑞の妹、九条武子は風邪をひいて敗血症を起こし、昭和三年二月に死去した。享年四十二歳である。

大谷光瑞師の著作は多く、昭和九年から翌年にかけて発行された「大谷光瑞全集」全十三巻に収められている。

昭和十五年（一九四〇）四月十日、光瑞は神戸発がね丸にて九州視察の途に上る。翌十一日には別府市で臨時光寿会を開催し、「欧州戦争と我國民の覚悟」について講演を行なう。

昭和十六年の大戦勃発の十二月八日、光瑞は東京にいた。この年の五月、彼は健康の不調をおぼえて、妹九条武子の建てた東京築地のおそか病院に入院して翌月退院したが、引き続き日本国内で療養に努めていた。

翌年の十七年六月、光瑞は再び発病して、東大病院で診断をかけたところ、膀胱乳嚢腫びょうこうにゅうしゅと病名を告げられた。患部は癌性である。彼は二回に分けて手術を受けた。

四 光瑞師と別府市

昭和二十年（一九四五）八月の日本の終戦時、大谷光瑞は満州の大連にいた。光瑞は中国側に抑留され、十一月、膀胱の腫瘍しゅようの悪化と共に満鉄（満州鉄道）大連病院へ入院した。当時、光瑞は七十歳である。

昭和二十二年二月末、光瑞は大連から乗船して、三月七日、九州佐世保に上陸した。光瑞は佐賀県嬉野町の国立病院に入院して膀胱の手術を受けた。

その後、光瑞は別府亀川国立病院で手当を受ける。三月二十四日、別府から船便にて神戸に上陸、京都大学病院に入院した。五月十二日に京大病院を退院して、再び

十三日には別府に向かい、亀川の国立別府病院に入院、別棟特別室で療養する。

国立病院では、小野寺博士（院長）の看護を受け、二月か月ほどで退院した。光瑞は、この間、脇鉄一別府市長を訪問する。

光瑞は別府の温暖な気候と風光明媚な温泉地が気に入っていて、ここを永住の地とするつもりでいた。

光瑞は亀川国立病院を退院後、しばらく新別府の林氏の二階に住み、同年七月別府鉄輪温泉の旅館ときわや（現鉄輪風呂呂本三組）の離れを借りて住むことになる。しかし、ここは三室しかなくて手狭だった。

別府市長脇鉄一氏の奔走で、当時の建築規制により十五坪の別荘を秘書山本節子さんと二人の名義で併せて三室と四室、都合三十坪足らずの家を建築することにした。

光瑞は、同年十一月大分を始め、福岡・佐賀・熊本・鹿児島・宮崎等各県を巡回し、知事その他に面接して、産業の復興に助言を与えた。十二月下旬、別府市鉄輪に新築した別荘に移り居住する。この別荘は料亭「なるみ」の経営者高岸源太郎氏から提供された鉄輪風呂呂本の土地

に建てた。

旅館ときわやの現当主加藤正義氏は「この別荘は光瑞貌^{びみか}下自身が設計されたもので、屋根は二重造り、床下は物置などに使用のため高くしていた。そのため、この家は冬暖かく、夏涼しかった」と述べられている。

部屋には敷物もなく、寝台二個と書見用の大机があるきりだった。これはかつてベルギーで光瑞自身が大地図の書見用に特別注文して制作させた自慢の机で、京都に置いてあったものを取り寄せて使用されていた。

昭和二十三年（一九四八）になって、光瑞は協鉄一別府市長から観光都市のあり方について御高見を拝聴したいと頼まれ、市議会堂で一時間ばかり講話を行なった。

講話の内容は、まず、第一には「べっぶ（別府）市」は外国人にとって発音しにくいので、「はやみ（速見）市」に変えた方がよいという意見を述べられた。第二には日出町や湯布院を合併して、大型船が寄港できる港を日出町につくるという大観光都市建設の構想である。

光瑞はその頃はかなり健康がおとろえて小用が近くなっていたのだが、講話のあとで「よく一時間も中座しない

でしゃべれたよ」と側近下瀬賛事に話しておられた。

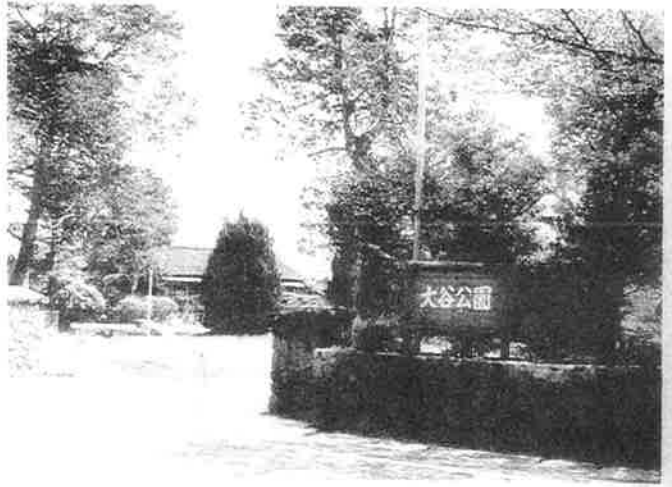
鏡如上人は、十月十四日には危篤状態になり、翌五日夕刻に鉄輪風呂本の別荘にて遷化^{せんげ}（死去）された。享年七十三歳である。

十一月八日、京都の大谷本廟で葬儀が営まれた。諡^{おくりな}は信英院という。

五 大谷公園と瑞光寺大谷会館

現在、鉄輪の旅館ときわやの庭には当主加藤正義氏が昭和三十四年（一九五九）十月に建てた「光瑞上人記念之家」と記された小さな石碑がある。

光瑞が使用したステッキは、先端に金具のついた竹製で長さが一メートル、目盛りがついていて、水深、道幅、建築物や土地の測量などに使用していた。このステッキは光瑞上人が遷化されたのち、高岸源太郎氏に贈られた。加藤正義氏の話では、光瑞貌下の身長が一八二センチ、体重が八十三キロもあったため、倒れた際あごにつかえないように、長さ二メートルのステッキも用いていたという。



鉄輪風呂木

の別荘は、大谷記念館として鉄輪に残して置くよう脇鉄一別府市長始め旅館ときわやの主人加藤称司氏（正義氏の父）らが木願寺に陳情したがかなわなかった。その建物は昭和二十四年（一九四九）七月、解体されて北浜の本願寺別府別院（現別府市北浜三丁目六の二）に移された。

鉄輪の別荘跡地は、この年、高岸源太郎氏が別府市に寄贈して、現在「大谷公園」として別府市が管理している。

る。

公園内北側の別荘跡地には、昭和二十五年四月に「光瑞上人遷化之處」と記された大きな石碑が建てられた。

この石碑の立石者は料亭「なるみ」の経営者高岸源太郎氏で、賛助者は別府市長脇鉄一氏、加藤称司氏、石川克太郎氏の三名、碑の文字は当時鉄輪のときわやの離れに在任の南画家で、田能村竹田、帆足杏雨の流れを汲む甲斐虎（厩）山画伯の書になる。

石碑の正面には、第二十一世大谷光昭前門主（勝如上人の筆になる「光壽」と彫られた香炉台が据えられた。光瑞上人遷化の石碑の左手北側には「高岸源太郎翁頌徳碑」の石碑がある。

公園南側の小川（平田川）を隔てた隣接地は、当時広島の寿司屋「四斗平」経営者首藤氏所有の畑であったが、昭和三十年（一九五五）秋には大谷光瑞還浄地「瑞光寺大谷会館」（現別府市御幸三組）が建設された。

この瑞光寺大谷会館（現任職 谷文学氏）には光瑞鏡如上人の遺品や写真が展示されいている。遷化のさい脇鉄一市長に贈られた両袖机が、現在大谷会館にある。

六 別府別院と大谷記念館

昭和二十三年（一九四八）十二月、光瑞鏡如上人の分骨が京都の本派本願寺から別府教堂（昭和二十四年三月に別府別院に昇格）に届けられ、現在別府市北浜の別院境内納骨堂中央に安置されている。

光瑞上人が当時鉄輪で住居されていた別荘は、翌年の昭和二十四年七月、北浜の本願寺別府別院の境内、本堂北側に移転され、大谷記念館となった。この建物は、五十年を経た平成二年（一九九〇）秋に取り壊された。

現在、別院境内にある新しい大谷記念館には、大谷家から別府別院に下付された光瑞鏡如上人の遺品と写真が数多く展示されている。なお、上人が愛用していたベルギー製の大机も安置されている。

西光寺（別府市亀川）の高橋篤法住職と覚正寺（日出町豊岡）の掬月誓成住職の二人が、別府別院の大谷記念館を研究テーマとして「大谷探検隊の業績を通して、光瑞上人の姿を考えたい」と活動している。

この大谷記念館が主催して、高橋、掬月両住職が「こんな人が大分県別府市と深いゆかりがあることを知って

ほしい」と、平成四年十月に大分県立生涯教育センターで「光瑞と大谷探検隊」の文化セミナーを開催した。

引用参考文献

- 大谷光瑞 昭五〇 杉森久英著 中央公論社
世界の人間像一一 昭三八 藤本光城著 角川書店
大谷探検隊 一九六六 長沢和敏著 白水社
大谷光瑞 歴史と旅 平五 駒 敏郎著 秋田書店
ある市長のノート 昭三九 脇 鉄一著 協事務所
本願寺別府別院誌 昭六二 本願寺別府別院
鏡如上人年譜 昭二九 京都本願寺
大分合同新聞 平 四・一〇・一二

